『「アバ、父」と叫ぶ』（ローマ人への手紙 8 章 12-17 節）2020.6.21.

＜はじめに＞ 今日は父の日です。両親から受け継いだいのちの祝福に目を留め、いのちの流れを遡りつつ感謝したいものです。私たちクリスチャンには、肉体のいのちとともに御霊によるいのちを受けていると聖書は言います。御霊のいのちを有する人とはどんなものなのでしょうか。

Ⅰ　三種類の人（15）

①生まれながらの人（Ⅰコリント 2:14）

人は肉体のいのちはあっても、霊的には眠っている人です。理性と良心でかろうじて善悪を判断していますが、霊的・道徳的には目覚めていません。だから、神についても自分についても無知で、罪責感も鈍く「自分は道徳的で自由だ」と思い込んでいます。

②律法の下にある人（奴隷の霊）

生まれながらの人に聖霊が働き、たましいに光を注ぐと、罪の奴隷であることに目覚めて、神に認められようと格闘を始めます。神が与えた律法の要求に応えようと真剣に努力しますが、するほどに自分が罪に縛られ無力であることを実感するばかりです。

③福音の下にある人（子とする御霊=養子の霊）

罪の束縛と律法の要求にもがく人が、キリストの十字架と復活の福音を聞き、自らを委ねるとき、聖霊を通して神の愛がたましいに注がれ、罪の赦しを経験します。もはや奴隷ではなく、神の子どもの身分を与えられ、恐れは愛にかわり、苦悩は喜びにかわります。

Ⅱ　神の子の義務

①肉に対する義務ではない（12）

「義務」（第 3 版:責任、文語:負債）と聞いて、「何かしなければ」と怯えてはいませんか。奴隷の霊の残像です。キリストの福音によって負債はすべて払われたのに、またも自分の力で神の要求に応えようとする古い肉に従う生き方からは自由にされています。

②生きるための戦い(13-14)

9-11 節には私たちが御霊によって生かされる神の御業が記されています。いのちは抵抗力・免疫力を有し、自らを守るために外敵を殺します。神の子どもも霊的免疫力を高めなければなりません。神の御霊に聞き従い、導かれることを選ぶばねばなりません。

③相続人として（15、17）

親は子にいのちとともに子の立場を与えます。孤児同然の私たちを、神は奴隷ではなく実子として迎え入れてくださいました。子は家族として苦難も分かち合いますが、やがて相続人として親が所有するすべてを受け継ぎます。キリストはその筆頭相続人です。

Ⅲ　神の子の特権

①「アバ、父」(15)

ゲッセマネの祈りで主イエスは御父をこう呼んで祈られました(マルコ 14:36)。「アバ」は父親への親愛の情を込めた呼び掛けです。十字架を前にイエスが切に願われたのは、何だったでしょうか。その時「アバ、父」と呼び掛けられたのは、どうしてでしょうか。

②私たちも叫ぶ(15)

このイエスの十字架と復活によって、私たちは神と和解し、神の家族の一員に加えられました。その関係に曇りがないとき、子どもは素直に大胆に願えます。それが「アバ、父」の叫びに表されます。私たちも今日、「アバ、父」と心から叫べるでしょうか。

③聖霊の証し(16)

祈りが聞かれることで神の愛を測る人もありますが、何事でも話せる関係を保っていることこそ大切にしなければなりません。祈ろうとする私たちに、御霊は「これはわたしの愛する子」（マタイ 3:17）との御声と救いの歓声で取り囲んでくださいます（詩篇 32:7）。

＜おわりに＞ かつては遠く隔たり、何の関わりも無い者を、父なる神を「我が主、わが父」と呼べる立場と関係に聖霊は導き入れてくださいました。私たちは神の子どもにしていただいたのです。 大胆に「アバ、父」と叫び願う声は、 神の子の特権であり証しです。(H.M.)